

2014年度第2四半期決算説明会サマリー（2014年11月10日開催）

(1) 2014年度 第2四半期決算概要

①売上高	1,869 億円	前年比	+	55 億円	→	数量増+22 億円・販売価格差+33 億円
②営業利益	94 億円	前年比	▲	11 億円		
＜要因別内訳＞						
		数量影響	+	21	→	電子・先端プロダクツ製品販売増
		円安メリット	+	5	→	価格+18 > コストアップ▲13
		価格転嫁遅れ	▲	2	→	価格+15 < コストアップ▲17
		コスト上昇	▲	24	→	エネルギー▲8 定修関連負担増▲10
						出荷増に伴う費用増▲7 他
		先行投資負担	▲	11	→	海外展開加速・研究開発他

電子・先端プロダクツ製品などの販売増や円安メリットあったが、原燃料価格高騰分の価格転嫁遅れ、プラント定修、営業費・研究費増等により、前年比増収減益。

期初予想比は売上高▲51 億円、営業利益▲11 億円で、電子・先端プロダクツ製品は概ね予想通りだったが、セメント・特殊混和材や産業資材の出荷が計画未達で、ステン系製品等の値上げも遅れた。

(2) 2014年度 業績予想

売上高 4,000 億円 営業利益 250 億円（5月期初予想据置）

エラストマー・機能樹脂と電子・先端プロダクツの上振れに対して、インフラ・無機材料の下ぶれなどセグメントによって強弱はあるが、トータルでは期初予想と同額。

(3) 経営計画「DENKA100」

再スタートを切った「DENKA100」の2年目である今年も昨年に続き具体的施作を実行

「生産体制の最適化」

海外生産化加速 : 高信頼性放熱プレート 中国・新工場建設
電子部品搬送用部材 ベトナム・新工場建設

国内の事業再構築 : 酢酸ビニルモノマー事業撤退

「成長分野への資源集中」「次世代製品開発」

特殊混和材事業の海外展開 : 地域事業統括会社設立（中国および東南アジア）

検査試薬とワクチン事業の強化・拡大: 試薬一貫生産体制構築・供給体制整備・安定的品質確保

今後は更なる成長に向けて M&A など戦略投資に注力

(4) 株主還元方針及び成長に向けた投資財源

「DENKA100」の最終成果である収益について、株主の皆様への配分を定めた「株主還元方針」を策定するとともに、さらなる成長に向け、M&A などの戦略投資の財源を明確化

1. 株主還元方針 総還元性向 50%を基準

※ 総還元性向 = (配当 + 自己株式取得) ÷ 連結当期純利益

2. 還元方法 ① 配 当 : 配当性向 最低 30% + 安定配当

② 自己株式取得 : 株価水準・市場環境等に応じ機動的に実施

3. 成長に向けた M&A などの戦略投資財源

株主還元後内部留保 + キャッシュフロー → 500 億円規模（2014 年～2017 年 4 年間）

4. 期 間 経営計画「DENKA100」(目標年度 2017 年)に向けた 4 年間

良好な財務バランスを維持しつつ株主還元ならびに戦略投資を最大化 → 早期に ROE10%以上を目指す

(5) 質疑応答

1 クロロプレングムの市況感・数量動向・為替影響

他社原料のブタジエン価格が千ドル近くで、特に欧州ではもともと低いものがさらに低くなっているため、外貨建価格が下落し、当社にとって厳しい状況。円安メリット面があり、需要も堅調だが、数量増は難しく、通期予想出荷数量は前年比微増。加えて、エネルギーコストも上昇することから、数値はかため。

2 セメント・特殊混和材の回復状況

セメント業界全体で6~8月の出荷が前年比マイナスだったように、入札遅れにより公共事業は少なかったが、9月からは特殊混和材が用いられるトンネル工事などの着工が開始しつつある。ただし、他社も苦戦のセメント値上げは、ほとんど織り込んでいない。

3 電子・先端プロダクツの製品毎の動向

業績の牽引役は相当先まで受注があるアルシンクと窒化アルミ基板。上期ネックだった人員手配も進み、下期は上振れ期待。アルシンクはまだ増産余力があるが、窒化アルミは少額の増産投資を考えている。また蛍光体は4KTV用途で好調、機能フィルムも携帯端末等の需要動向次第かつ競争もあるが、数量増を予想。一方、熔融シリカは横ばいもしくはややマイナス。

4 上期未達だった生活・環境プロダクツの下期の考え方

インフルエンザのPOCTは、在庫調整や定修により昨年やこの第1四半期は低調だった。しかし第2四半期以降、他の感染症流行で、多少の熱でもすぐに検査する傾向にあり、下期にかけ出荷増。加えて他の新規感染症POCTや試薬も好調。また下期型のDXフィルムや、食品包装材料の原料安もプラス要因。

5 原材料価格下落局面における食品包装材の考え方と今後

原料先安感による買い控えはない。今後は原材料価格高騰のあおりを受けている汎用品から耐熱や耐油など高付加価値品にシフト。

6 超悪玉コレステロールのFDA認証の進捗状況

認証取得は少し難航しており、当初計画から1年程遅れるが、必ず取得する。

7 為替・ナフサの下期の前提に対する足元の状況

下期の為替感応度は1円円安で1億円のプラス。現状ナフサも6万円を切っており、その分値下げ要求もあるだろうが、樹脂加工品で少なくとも数億円は利益が残るとみている。

8 2017年度の目標営業利益600億円の構成とそれにむけた来期以降のイメージ

あくまでもあるべき姿、目標であって積み上げた数字ではない。経済環境にもよるが過去最高益の300億円をベースにこの1年半で実行した具体的施作の利益100億円を加え、さらに新事業やM&Aで目標を目指す。

9 今回策定の株主還元方針はこれまでのものを踏襲するものか

従来方針に加え将来に向けた投資について明確化した。

10 総還元性向50%を基準とすると、利益が減った場合、配当も減るのか

仮に営業利益が200億円以下となっても、できる限り年10円配当を維持。増益ならそれに応じて増配したい。

11 戦略投資財源500億円の算出の考え方

今の純利益の水準から還元額を引くと90億円程度。これに減価償却額230億円と、通常投資200億円の差額120億円程度×4年。

12 棚卸資産・回転月数増加の理由

価格要因によるもので、主に電気代上昇によるクロロプレングムの在庫金額上昇。評価減はない。

13 これまでの具体的施策の中で業績寄与の大きいもの

売上高は、特殊混和材の海外展開150億円、検査試薬増強100億円、大連・アルシンク、ベトナムのカバーテープ各10億円で、千葉の超高純度アセチレンブラック30億円。